


A photograph of a tree-lined sidewalk next to a street with buildings and a person walking. The scene is captured from a low angle, looking down the sidewalk. The sidewalk is paved with grey concrete and has some fallen yellow leaves scattered on it. To the left of the sidewalk is a low, grey concrete wall. To the right is a street with a white van and other cars. In the background, there are multi-story buildings with balconies and windows. The trees are tall and have green and yellow leaves, suggesting autumn. The sky is bright and slightly overcast.

Flowing notes in the wind

Eriko Fujiwara

to you
and for the pellucid little girl,
who once lived in me 🎵



青空を集めている
あじさいのつぼみ
青いガラス瓶の中
明るい陽に揺れる


痩せ細った手で
震える筆の先から
搾り出したような 一枚の絵
淡い青のあじさい

木立に濾された光は
揺れる葉の上に転がって
小さな音をたてる
サティのピアノが聞こえる

白い扉のホスピスにいた
荘厳ミサ曲より
ジムノペディが似合っていた
彼女の淋しい笑顔

やがて灰色になる この庭に
青空を吸い込んだ
淡い青のあじさいが咲く
白い壁に掛けた絵のように

彼女の不在は
所在無げな白い椅子の上
蟻がせつせと
夏の準備をしている

A photograph of a man and a woman standing on a beach, looking out at the ocean. The man is wearing a dark shirt and pants, and the woman is wearing a light-colored dress. The ocean is a deep blue with white waves crashing onto the shore. The sky is a pale blue.

あたしはあれから
いくつかの夏を過ごして
青い海の白い波のきらめきに
あなたの面影を想った

あわただしい足音を残して
季節は通り過ぎていくけど
風にさりげなく流れる
あなたの歌は変わらない

うつむいたあなたの前髪を
揺らせる潮風にさえ憧れた
少女の頃に戻れたら
失うことの意味も知らずに

透明な緑のゼリー
透かしてみているあなたの横顔
あたしの肩にそっと
あなたの言葉がとまる

命日 ーまた新しい夏がめぐってくる

夏の香りを雲の影に隠して
やさしい雨が夜を濡らす

切れ間からのぞく陽にきらめく
水たまりごしに見える
あなたが好きだった夏


思い出は遠ざかって行くけど
髪を揺らす青い風と
目を閉じて聞いた潮騒は
止まった時間の中にいる

もっと深いところに刻まれた記憶
あなたが勇気をくれた夏

海風を待ちながら弾んでる
きっと その気持ちわかってくれるよね
白いTシャツとブルージーンの自由
そこから始まった気がする

あたしは元気です
そして サヨナラは言わない
いつもこころのどこかで
あなたの歌は流れているから

雨があがったら
あなたが好きだった夏がめぐる

A scenic landscape of a valley with mountains, a river, and a dam. The mountains are covered in green forest, and the sky is a clear, pale blue. In the foreground, there is a rocky riverbed with some green vegetation. A dam is visible in the middle ground, with water flowing through its spillways.

透明な大気に満たされていた
谷あいの小さな あの村に
あたしの夏は いつも帰っていった
斜面のトマト畑で 見上げた空に

悲しみはなかった 日暮れの蝸の声にさえ
秘かに憧れていた 少年の笑い声にだけ
今日の次は明日 明日の次は明後日
謂れのない希望は 湧き上がる真っ白い雲へ

いくつもの季節が 流れ過ぎた
いつの間にか 忘れ果てた 草熱れ
いろんな人の悲しみが 通り過ぎていった


聳えていたはずの山は 低くお辞儀をして
遠かった山道は ぶらぶら歩きの散歩道
もう帰ってこない あたしの夏は

透明な木漏れ陽が　ころころと
転がっている　密やかな苔の森に
生を終えた　蝉が仰向けに凝然と
夏の終わりは　こっくりと乾き始めた

風が流れて　何かを囁いて過ぎた
手を繋いでいたよね　あの夏
森の小径は　しんと静まって
山羊の草を食む音が　朝霧の向こうから

黄色い花の名前を　あたしに告げた
気遣わしげに　そっと　触れながら
きみの白い指先が　うっとり　夢見るように

白樺の林を　ひらひらと音も立てずに
あたしは　黒い羽の蜻蛉を追いかける
忘れてしまったものを　思い出すために



夕立の後 虹がかかった 山に
川は澄んだまま 流れていた
やさしい人たちが暮らしていた 美しい村に
笹の葉はしゃらしゃらと 風に語っていた

肌に川の香りを残した少女の
葡萄棚の下で 本のページをめくる指先
葉洩れ陽は丸く ころころと転がった
柱時計がぼーんぼーんと 時を告げた

帰らない夏の日たち
あたしは 透きとおった時間を失った
やさしい人は 時の隙間に姿を消した


きみはもっと 透きとおっていたよな と
無邪気に あの子が 話しかける
お下げ髪が揺れていた 遠ざかる夏の風景

小さな青い駅で
列車を待っていた
朝の図書館に出かけて
行き先を調べてきたのに

真鍮のカランに しがみついている
蝉の抜け殻を見つけた瞬間
どこが あたしの行き先なのか
分からなくなってしまった

入道雲を 斜めに見上げた
信じる力は 追憶に似た熾火に
夢見る力は 陽炎の向こうに退いた

もう今日の列車は 来ないのだろう
もう一度最初から 繰り返すルフラン
もう夕闇に 走馬灯が回り始めた

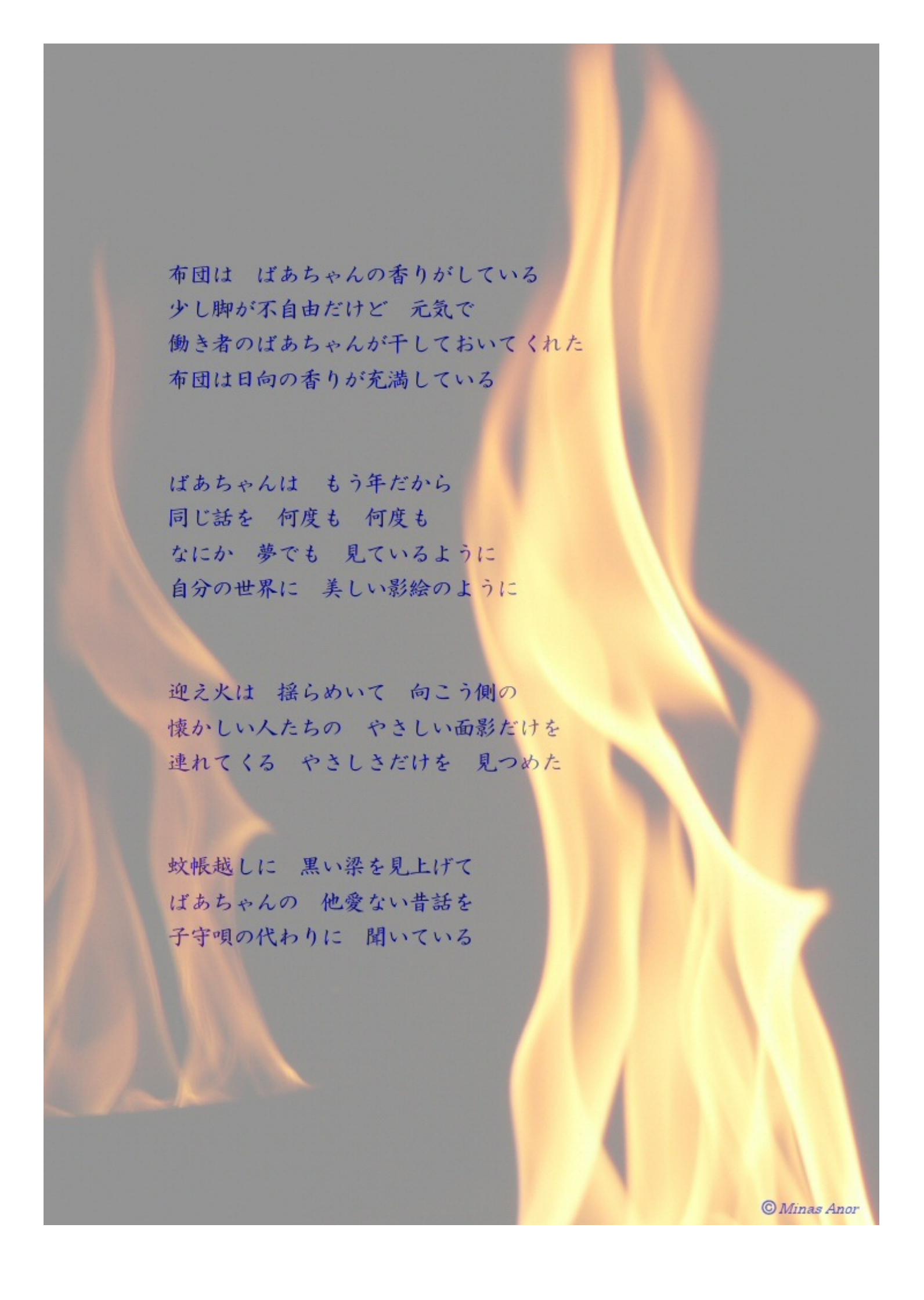


夢の続きに揺蕩いながら 目を凝らした
鶏小屋の薄暗がりには 白い卵を探した
ゆるやかな夏の朝に 竈の煙は薄らいで
元気なお釜は 薪の爆ぜる音に合わせて

谷を抜ける風は 川面に小魚を追って
揺れる青田波の向こうに 祖父の麦藁帽
見上げた斜面の畑に 祖母の白い農婦帽
あたしの髪は風に靡いて 夏の香りに染まった

村の夏には ほんとうの暮らしが
飾ることのない 喜びと悲しみが
包まれていた きっとあれが ほんとうのあたし

合歓の花は凝然っと まだ夢を見ていた
青い柿の実には朝露に まだ見ぬ秋を夢想した
薄青い煙は 明るく光る空へ 夏の朝に



布団は ばあちゃんの香りがしている
少し脚が不自由だけど 元気で
働き者のばあちゃんが干しておいてくれた
布団は日向の香りが充満している

ばあちゃんは もう年だから
同じ話を 何度も 何度も
なにか 夢でも 見ているように
自分の世界に 美しい影絵のように

迎え火は 揺らめいて 向こう側の
懐かしい人たちの やさしい面影だけを
連れてくる やさしさだけを 見つめた

蚊帳越しに 黒い梁を見上げて
ばあちゃんの 他愛ない昔話を
子守唄の代わりに 聞いている

かららん
ころろん

約束してた夏祭り
浴衣の帯は苦しいけど
少し急ぐ下駄の音が好き

髪をあげた少女の瞳に映る
裸電球のあこがれ
くつきりと 影法師が揺れる

うす暗闇で手を引いてくれた
やさしくて 大きな手
抱き上げて眠らせてくれた
不思議に ひんやりした肩

かららん
ころろん…

藍色がしみ込んでくるたそがれ
遠く隔たった年月の糸を結べば
若かったあなたの
喜びと悲しみが見える気がする

下駄を転がす感触がよみがえる
大好きな季節の 大好きな時間
アルバムのページを繰って
青いリボンを確かめてみよう

約束してる夏祭り
並んで歩くのは恥ずかしいけど
少女に戻る下駄の音が好き

ゆく夏に

水絵具で描いた 月の光
宵待草の恋は セピアの思い出に
茶色い時代の かざぐるまが回った
夜店の裸電球に くっきりと影を作って

夏が去っていく 風と花を連れて
公園の片隅に ぶらんこが揺れた
名前も知らない 雑草の穂が
帰る場所のない ころろのように

海の色に戸惑った 白い波は碎けて
畑のひまわりは 揃ってこちらを見ていた
ポプラは高く 風を集め 光を集め
目を閉じると 赤い花が揺れていた

四色羽根のかざぐるま
回って色は 溶け合って消えた
ほうき星の尾に掃かれて
言葉は なすすべもなく とりどりに

丘の上から飛ばした 夕暮れに
紙飛行機は滑り降りた 赤く染まって
軒下の巣は 留守になって
燕は手紙を運び去った 遠い南の国へ

静けさを取り戻した空に ぽっかりと
鮮やかな油絵具の 月が浮かんだ
干からびた ゴッホの耳が
がさがさと 石畳を転げまわる季節へ

Flowing notes in the wind

<http://p.booklog.jp/book/98661>

著者：藤原 絵理子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arwen-eriko/profile>

all photos by Arwen_Eriko

©*Minas Anor*

All rights reserved

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98661>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98661>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ